

## 四日市東日本大震災支援の会 第8回派遣報告（三重県紀宝町 2011年10月16日）

～災害ボランティアセンター閉所の日に作業を行って～

四日市東日本大震災支援の会

代表 鬼頭浩文

台風12号による水害では、三重県において2名の死者と1名の行方不明者が出た。紀宝町でも、1000棟以上が床上浸水の被害を受け、9月から多くのボランティアが作業をおこなってきた。多くのボランティアが作業を行い、ニーズは着実に収束の方向に向かっていき、われわれが派遣の申込を行った10月16日は、結果的には災害ボラセンの最後の日、つまり「閉所」の日となった。開所から42日で延べ5,314人のボランティアが作業にあたったということである。

本会では、10月16日の早朝5時に大学を出発し、紀宝町でメンバー16名が作業を行った。メンバーは、四日市大学の学生6名、本学に入学が決まった高校生1名、教職員が2名、それと桑名北高校の生徒会を中心とする生徒6名と先生1名、合計16名である。

われわれは、個人宅の清掃作業と、避難所の片付け・清掃の2チームに分かれて作業を行った。個人宅では、床の掃除や冷蔵庫の片づけを行った。避難所はこの日が最後ということで、避難者が紀宝町役場の用意した住宅に引っ越し手伝いと清掃を行った。両方とも午前中で作業が終了し、午後は全国から届いた支援物資の残りを整理して移動するという作業であった。ティッシュボックス、マスク、飲料水などが中心で、大量の物資を紀宝町職員の指示のもとで運搬していった。

作業が終了してボラセンに戻ると、すでに多くのボランティアが片付けを終了して帰途につくところだった。皆が爽やかな笑顔で手を振りながら帰っていくのを、ボラセンの皆さんと一緒に手を振って見送った。われわれもボラセンがある紀宝町福祉センター内のシャワーを使わせていただき、さらにはボランティアのために用意された炊き出しのおにぎり、大学いも、焼きたてパンなどをいただき、ボラセンの皆さんと歓談した。気が付けば、われわれが最後の団体になっていた。

福島県金山町の7月末に発生した豪雨対応のための災害ボラセンを8月13日に訪問したときにも感じたことだが、その金山町においても、紀宝町においても、作業用の物資がとても充実しており、ボラセンのスタッフの数もとても多かったことが印象に残っている。東日本大震災では、被災地がとんでもなく広域にわたっており、しかも各地で道路や鉄道が不通となって、どこのボラセンもスタッフ・物資・ボランティアの全てがどうしようもないほど不足していた。ボランティアが強く必要とされた初期の3か月は不足、作業が収束してきた7月以降に物資やボランティアが殺到して現地が混乱するという、重大なミスマッチングが起こっていた。どのような災害に対しても、迅速に柔軟に対応できる、必要十分な「準備」をどうすべきか、何かと考えさせられる派遣だった。

